

性暴力の歴史社会学、 加害者の語り

牧野雅子
社会学シエンダー研究

元警察官の研究者と紹介され

ることが多い。単に職歴からではなく、研究テーマや視点のユニークさゆえだと思われることが望みである。そんな私が、今年3月『刑事司法とジェンダー』（インパクト出版会）を上梓した。性暴力加害者の責任を問う法のあり方を探るべく、歴史研究や連続強姦事件の捜査・裁判分析、加害者に対するインタビューを行ったものである。しかし、こうした「調査」の常として、書かれたこと・もののごく一部に過ぎない。

手元には、119回に及んだ加害者に対するインタビュー記録や加害者からの81通もの手紙（文字にして26万字）、何冊もの傍聴記録が残る。頑なだった加害者が事件について語り始めた時のこと、公判が進むにつれ荒れていく加害者、インタビュー

の中で行使される権力性。こうしたインタビューの経緯は、この事件にとどまらず、性暴力や犯罪加害者を理解するためにも記しておく必要があると考える。

歴史資料についても然り。拙著では法の歴史を整理するに与り始めたので、社会的背景にまで踏み込んだ記述が出来なかったのだが、近世以降の性暴力について、立法議論のみならず、取締り記録や新聞記事等、相当な資料を収集している。それらを中心に、性暴力・性犯罪の歴史社会学をまとめたい。

既にまとまったものとしては、治安維持に関わる女性たちに関する歴史社会学的研究がある。性犯罪捜査に女性警察官が導入されて久しいが、彼女たちもそのジェンダーゆえに抑圧される存在であったことは記しておく必要がある。また、戦時性暴力の新たな解釈を提示すべく、戦時期に「被害者」が主体性をいかに奪われてきたかを明らかにする試みも続けている。

書きたいテーマ・出したい本

高度成長期の生活 変容を聞き書く

赤嶺 淳

東南アジア地域研究食生活誌学フィールドワーク教育論

縁あってマレーシアはサバ州・コタキナバルで暮らしている。

いま、東南アジアは高度成長に湧いている。コタキナバルも例外ではない。あるガイドブックが「ガラガラのモールをどれだけ建てれば気がすむのか」と、市中の建設ラッシュを揶揄するほどだ。

しかし、冷房が効いたモールこそが、経済成長の象徴なのである。こうしたモールでは日本並みのサービスが享受できる。家族でホッとひと息つけるのは、こうした空間だ。

そんな街で、妻とわたしは、ある実験を思いついた。「なるべく冷蔵庫に依存しない生活をしてみよう」、「スーパードより、市場を中心に生活を組み立ててみよう」というものだ。

わたし（一九六七年生）が、

物心ついたときには、街にはスーパーも、家庭には冷蔵庫も、もちろんあった。

たしかに高度成長期以前の生活には、不便なことが多々あったであろう。しかし、だからといって、人びとの生活は味気ないものだったのか？

市場の魚屋には、たくさんの魚が並んでいる。「今日は、蒸してみたい」と言うと、即座に候補を推薦してくれる。肉屋は、頭から尻尾まで解体したての生肉を販売している。冷凍肉の味しか知らないわたしには贅沢の極みに思える。

日本の高度成長期前後の、また激変の渦中にある東南アジアの生活の変化を具体的に学ぶべく、食卓の変化についての「聞き書き」をおこない、「食生活誌学」を標榜してもいる。

インタビューでは自宅の冷蔵庫から取り出したヤカンの水の「冷たさ」を懐かしむ話者がいた。冷たいビールもまた、冷蔵庫ゆえの存在であることを思い知らされている。